

定年になったら

地域に根を張ろう

わがボランティアの記

その一 竹炭づくりボランティア編

佐藤 義也

はじめに

生きがいについて、少し述べてみたいと思います。

松下電器に勤務していたころ、私は、家庭電器製品の販売を通じて社会に貢献しているのだという強い自覚をもっていました。それを生きがいという表現でとらえるには、あまりに広く漠然としていません。しかし、それに近い思いは抱いていました。

定年まで、人事・総務畑におりましたので、「自分は、適材を採用・育成して適所に配置し、特に、トップマネジメント組織の活性化を通じて松下電器に貢献するのだ」と、強い使命感を抱いていました。生きがいったといえるでしょう。

三人の子供が高校へ進学したとき、私は、妻に職業をもつように勧めました。

彼女は、精魂を傾けるような趣味をもっていませんでした。そこで、私の生きがいが、「職業を通じての社会とのかかわりの自覚」であることに照らし、子育てが一段落した妻が、もし生きがいを見失っては可愛そうだと案じ、職業につくことをアドバイスしたのでした。彼女は、以来、約二〇年間、職業をもって社会とかわっています。

定年退職後の生きがいは、どう考えたらいいのでしょうか？

私は、地域社会に根をはることをお勧めします。

現役を退くと、報酬をもらっての責任を果たさなくてよいかわり、誰からも期待も当てにもされない孤独な毎日を送ることになります。人間は、本来、社会的な動物であるらしく、そういう生活にほとんど耐えられません。そこで、新しい生きがいを探しに、または、当てにされることを求めて、趣味や奉仕の世界へ入っていくことになります。

そこで私のアドバイスですが、趣味や奉仕で自分の世界を新しく築くとき、地域社会に根を張るかたちでやってはどうか、といったのです。

報酬をもらって働く現役時代の世界では、利潤を求め、大きくいえば経済原則によって何かが自動的に動くところでした。「経済原則によって動く世界」といえるでしょう。定年して住んでいる地域社会は、誰かが意図をもって、金銭なり労力なりを投じないかぎり、決して動くことのない世界です。「政策によって動く世界」とでもいましょうか。

「政策によって動く世界」では、ある意図のもとに、お金のある人にはお金を、労力のある人には労力の提供を求めています。ここは、期待と当てにされることが、いっぱい詰まった世界です。新しく趣味や奉仕を始めるのならば、ぜひとも、「政策によって動く世界」の期待に応え、当てにされている内容に従ってやってはどうかとお勧めします。そうすれば、誰からも期待も当てにもされない寂しい毎日とは、きつぱり、おさらばできます。

この一文は、試行錯誤によって地域社会に根を張っていく経緯をまとめた記録です。

会社とは別の世界を望んだのに…

一九九七年三月、満六十歳で、松下電器を定年退職になりました。

晴れた日も雨の日も、暑くても寒くても、三四年一ヶ月もの長い間、毎日、決まった時間に家を飛び出す生活からやっと解放されると思うと、正直、ほっとしていました。

会社が嫌いだっただけではありません。職場の困難な問題をすすんで引き受けるなど仕事生きがいと思ってきました。

しかし、定年後は会社と関係ない世界で活躍したいと、ひそかに決意をかためていました。松愛会という定年退職者でつくる松下電器OB会組織があり、多くのひとたちが入会して、老後、ここでゴルフや麻雀、囲碁、山歩きなどを楽しむのですが、これには参加しないでおこうと思っていました。

思いきり小説を書きたかったのです。学生のころ、少しかじったので、あとのブランクを、いっきに埋めるのだと心がはやっていました。定年後は、会社や大学仲間とのゴルフや飲み会などが急に増えると聞いていましたが、遊びに流されることなく、不義理しても頑張るのだと自分にいい聞かせていました。松愛会の総会などにも、あまり参加するつもりはありませんでした。

「何ごとも助走が大切とわかっていたのに、定年後ははじめたいこ

とは、現役のうちからもっと準備しておくべきだった」と、スター
トダッシュの失敗をなげく先輩を何人か見ていましたので、定年の
前年、私は「ようらの記」という小説を処女出版しました。これ
で、定年後のわが人生設計は万全と思っていました。

ところが、世の中、思うようには運ばないようです。

定年後の生活も軌道に乗りはじめたある日、近所に住む会社の先
輩の訪問を受け、いわれたことばが、「ぜひ、松愛会の世話役を引き
受けてほしい…」でした。

人生設計とは外れるので、一瞬、断ろうと思いましたが、でも、先
輩からの要請をあつさり断つてもいいのだろうか…。それに、長年、
世話になった松下電器です。恩返しするとしたら、会社OB会の世
話役を引き受けるのもひとつの道かなと思いなおし、初心を翻して
快諾しました。もちろん、小説を書くかたわら、時間の許す範囲で
のつもりでした。

松愛会という組織は、当時、全国会員約七、八〇〇名、二十七の
支部に別れ、支部には、責任者の支部長と地区委員と呼ぶ世話役数
名が配され、一定の方針のもとに、支部ごとに、自主的な運営をし
ているのです。

引き受けたのは担当人数約五 名の地区委員です。大阪府の北東、
人口約七万人の交野市という小さな町にある会員約三 名の支部

の、一地区の世話をするのです。

「これでいいの?」「会社への恩返し」

地区委員の役割はふたつありました。

ひとつは、担当地区の「世話女房」役です。病気の会員には見舞
金をもって見舞ったり、高齢や独居の会員を訪問したり、弔事には
急ぎ駆けつけてお悔やみを述べ、会員・友人への弔事連絡、通夜・
葬儀の受付、お香典の計算などの世話をするほか、総会や諸行事へ
の勧誘、受付窓口をつとめます。このように担当地区の会員を掌握
し世話するのです。

もうひとつは、「同好会」の幹事役で、ゴルフ、麻雀、囲碁などの
世話をするのです。

私の担当は、「見て歩こう会」でした。数キロのハイキングと観光
や社会見学をミックスした日帰りツアーです。担当するもう一人の
地区委員と二人で入念に下見し、適度な歩行と予定時刻通りの進行、
その土地の美味しい食べ物、一人では行けないが団体でなら可能な
社会見学を企画します。二カ月に一回の実施ですが、軌道にのると
当初一〇名程度の参加者が急増していきました。

二年も経って余裕ができますと、見て歩こう会の人気が高まったのはうれしいけれど、当初「長年世話になった会社への恩返し」と「心ならずも」引き受けた地区委員だったのに、「見て歩こう会」の参加者が増えただけでよかったのかしらと、少し喜びがゆらぎます。せつかく初心を翻したのに、これでは、なんだか少しもつたいない気さえします。

「いま、交野の山は、いや、全国の山は竹がびこって荒れていきます。竹を伐採して里山を守り、竹炭を焼いて川の浄化に使いませんか？交野市も、力を入れようとしています」

折も折、そんなアドバスをくれたのが、有井貞登さんでした。

彼は、松下電器労働組合出身の交野市議会議員で、市議会議長なども勤めて五期目の当選を果たした最初のころでした。私とは若いころの職場の仲間でもあります。

早速、彼の紹介をうけ、「見て歩こう会」担当のもうひとりの地区委員と、竹炭焼き体験に出かけました。里山をまもるボランティアの方たちが、近くの里山で一足早くドラム缶による竹炭焼きを手がけていたのです。

一日の体験で、細かいことは抜きで、これならやれると直感しました。

私の好意的な回答を知ると、彼は、つぎ、竹の伐採体験を提案し

てきました。ではと、早速、十名あまりの会員を集めると、交野市「農とみどり課」課長の三宅さんという人が、竹伐採のやり方をていねいに教えてくれました。

これは面白いと感じました。竹伐採はかなりハードで長時間やれば疲れますが、短時間なら、高い竹が倒れる瞬間は痛快で、少年の心に戻ります。それに三宅さんの熱心な態度を見ると、交野市が本気で里山を守ろうとする意思が伝わる気がします。

「これなら、苦労の甲斐があるかも…」

「窯は、スポーツレクリエーションセンターのものを使しましょう」
いよいよ核心の炭焼きのドラム缶の手配について相談しますと、有井さんは、即座にそう答えました。市の施設、星の里いわふねスポーツレクリエーションセンターには、いまは、使う人もない古い本式の炭焼き窯が眠っているというのです。

彼は、最初からちゃんと構想をもち、私を誘ったのでした。そうとわかると、私も真剣になって、彼と話しあいました。

「里山を荒らす竹を伐採して竹炭を焼き、その炭で川を浄化するのを、松愛会の活動に加えてください。私には、実行部隊がありません

ん。ぜひ、お願いします」

彼の真剣な眼差しを見、私は、初心からさらに遠ざかるのを承知で、快諾しました。

しかし、新米の一地区委員が、松愛会の活動と認定するわけにはいきません。当時の支部長は、慎重な方で、会の活動として決定するには時間がかかると判断し、松愛会とは別の「有志」の活動としてスタートすることにしました。

ドラム缶の竹炭焼きなら先輩がおり、かなり上手に焼いています。しかし、「本式の」炭焼き窯の先生はいません。ただ、スポーツレクレーションセンターには、窯を管理する職員の古賀さんという方が、炭焼きには一番くわしいと聞いていました。ともかく、その古賀さんを頼りに、炭焼きの第一歩を踏み出すほかないのでした。

竹炭を焼くという私たちの噂を聞き、「昔、焼いたことがあるので教えてあげよう」と名乗りでる人があらわれました。早速、古賀さんも一緒に伝授を受ける運びとなりました。

途中、古賀さんは、小声で、「ぼくの知っているやり方とは、ずいぶん違う」とつぶやいていました。彼が案じた通り、竹はすべて灰となつて失敗に終わりました。

そんな経過から、私は、古賀さんの知識は信用できると判断しました。

私の方で数名の有志を募り、いよいよ古賀さんから伝授を受けながら、試しの竹炭焼きがはじまりました。

「私は、あくまで窯を貸す側の人間です。皆さんが、中心でやってくださいよ」

窯代は一回五〇〇〇円です。彼をあてにしての活動となつては困ると思つたのでしよう、古賀さんは、しきりに煙幕をはっていました。

しかし、彼は、竹材の割り方、窯の入れ方、遮断壁といって窯の焚き口の作り方、炭化の始まる温度、それを知つての口焚きの仕方、焼きあがつたあとの窯の密閉の仕方、そのための密閉土の練り方、竹炭の出し方、窯の補修の仕方など、基本作業をひとつひとつ、側で、ていねいに教えてくれました。

ともかく炭が焼けた

試行のあと、早速、自分たち数名でやってみることにしました。

古賀さんは、試行のあと、窯の内壁をていねいに補修し、古い建築木材などの薪、密閉用の土、土を練る道具類など一式を整え、炭焼きしやすいよう準備してくれました。

ちなみに、しばらくして彼が転動したあとは、市の職員の方は、使用料をとるだけで、そうした準備はおるか窯の管理にさえ、誰ひとり姿を見せなくなりました。

それはともかく、教えの通り、第一日目、午前八時から「窯入れと予備焼き」です。八センチに切った竹筒を縦四つ割りにし、まず、窯底に敷きつめます。今度、それらを立てて窯いっばいに詰めると、天井まで少し空間ができます。その隙間を、寝かせた竹片で埋め、つぎ、その前面に耐火レンガを積んで「遮断壁」を立てます。

天井まで約一五センチの隙間を残して「焼き口」とします。そこで約二時間「口焼き」して火を落とします。

翌日、午前八時から「本焼き」です。排煙温度が五十度を超えたら竹酢液をとりはじめます。火を入れて約八時間後、排煙温度七十五度で火を落とし、通風口を閉めて約三時間、七十五度前後で安定するのを確認したら、作業を一旦打ち切り煙突も閉めます。

三日目、「本焼き」の続きで、通風口、煙突を全開にして口焼きを再開し、五十度くらいに下がった温度が、二時間ほどで七十五度に回復します。しばらくすると八十度を超えて炭化がはじまります。そうなれば、火は絶やさないうちに空気の流入を抑え、がんがん燃やす必要はない、自然に排煙温度はあがると古賀さんに教わったのですが、それでは炭が焼けないのではないかと不安で、皆、薪

をくべ続けるのでした。

排煙温度が二百二十度を超え、煙突の煙が透明な紫に変われば、炭化が終わったので焼き口と煙突を密封します。焼き口の鉄扉には、数個の通気口があり脱着式の鉄蓋がついています。真つ赤に熱しられた鉄扉に、どろどろに溶いた密閉土を投げつけて鉄蓋もるとも密閉しますが、密閉土はぼろぼろと落ちます。午前二時ころ、密閉が終わると、やっと済んだという解放感と、うまく焼けたらどうかという不安感がこみあげてきます。

翌朝から三日間観察し、排煙口の温度が、毎日、百度ずつ下がっておれば成功で、火を落としてから一週間後、いよいよ「窯出し」で、密閉土を叩き落して窯を開きます。

窯出しの瞬間は、私たちにとって歴史的瞬間でした。密閉土を、鎚で叩き落して鉄扉を開くと、竹炭ができていました。歓声があがりましたが、焼き口に近いあたりは白い灰となって炭のかたちはなく、取り出していくと、真ん中あたりは、下半分がまだ硬い、真つ黒な竹の半生状態です。古賀さんは、焼きすぎと炭化時間の不足とコメントしましたが、そんなことより、ともかく自力で炭が焼けたことに、私たちは大満足でした。

贈呈に使う炭を、本格的に焼く

自分たちだけで試し焼きができたのは、地区委員に交代があり、新しく田端外土勝さん、内野藤彰さんが加わったからでした。新しい二人は竹炭づくりにとても興味をいだき、積極的だったのです。試し焼きに成功したので、つぎは目的をもって本格的に焼く必要がありました。今後のことを考えると、できるだけ多人数で組織立つて行うことが理想でした。

ちょうどそのころ、私の住む妙見坂という町では、自治会館の建設という大プロジェクトが進んでいました。この地区では「妙見坂まちづくり委員会」という組織が一九八七年に結成され、「わが町は、われわれの手でつくろう」という動きが活発でした。

ここは一九六〇年代後半に松下電器が従業員用に宅地造成したところで、いまは減少して戸数約五百五十戸ですが、ほとんどが松下電器社員かOBで、当時移り住んだ新婚さんが、次々と定年を迎えていました。皆、松愛会に入り、まちづくり活動にも積極的に参加していました。そんな妙見坂で、同じ地区に属する町々にも使ってもらおうと自治会館の建設がすすんでいるのです。

その落成式の土産に、トライがはじめた竹炭を焼こうという話がありました。当時、竹炭はいろいろの効用があるともては

やされはじめていました。建設委員の一人でもある私は、早速、土産用竹炭プロジェクトに着手しました。全体の指揮は私がとりますが、炭焼きは古賀さんに指導をお願いしました。田端さんも指導員として特別参加です。

竹伐採から竹炭を土産用に加工するまで計四日の工程に人手が必要でした。妙見坂担当のもうひとりの地区委員、可児さんといっしょに興味を伝えて募集しますと、延べ八十名あまり、毎回、二十名以上の応募がありました。すべて妙見坂に住む松愛会の会員です。

これを見て、私は、松愛会交野支部における竹炭焼きの成功を確信しました。竹伐採や炭焼きの経験がなくても、「里山を荒らす竹を伐採して炭を焼き、川を浄化しよう」というイメージが、多くの人たちの心をひきつけるらしいと直感したのでした。

竹伐採はマニュアルを作って私と田端さんが指揮をとりました。窯入れから窯出しまでは、古賀さんが、細かくデータをとりながら見事な竹炭を焼いてくれました。良質の竹炭を選別して洗浄煮沸し、一〇センチに切りそろえるのは私が指揮しました。

「交野竹炭」というラベルは、可児さんが、得意の版画で和紙に摺り、それを、私が、スキャナーとパソコンで和紙・版画風ラベルに完成しました。効能書きはインターネットで探して最大公約的なものをつくりました。炭焼きにも、結構、IT技術が必要です。

あとは、セロファン袋に、一五〇グラムの竹炭を入れてリボンで結べばできあがりです。それは、女性の方たちにやってもらおう段取りでした。

竹炭焼き、正式にスタート

初めて正式に焼いた「交野竹炭」は、和紙・版画風ラベルとリボンによって土産風に装飾されると、立派になりました。市販品とほとんど遜色がありません。

これを見て慎重だった支部長も、決断されて、早速、地区委員による試し焼き、続いて支部全域から募った有志による炭焼きが行われました。やはり四日の工程ですが、必要な人手は、延べ五十名ばかりです。これにも予想以上の会員が集まりました。

こうして二〇〇一年一月、「竹炭づくり同好会」が発足する運びになり、メンバーの募集がはじまりました。

竹炭づくりをはじめるとは、私なりに思いがありました。ひとつは、いかにボランティアといえども、規律正しくありたいのです。

定刻開始の定刻終了。開始の挨拶や手順説明、終了挨拶、作業の

お礼。整理整頓、迅速な後片付け。とくに夏の竹伐採は、結構きついで、三〇分働いて一〇分休憩、計二時間程度で作業終了など、だらだら長時間作業厳禁…といった事柄を重視するのです。

つぎに、義務感や強制でのボランティアは永續きしないので、楽しくなければならぬと思うのです。参加者に竹炭を一キロ贈呈したり、バーベキューで打ちあげをするなど、また参加したいとリピートのかかる仕掛けが大切と思うのです。

三つ目は、地域ぐるみでやるということです。

先述のように、妙見坂では、定年退職者の増加で松愛会会員が増え、まちづくり活動などに参加する人が増えていました。妙見坂と同じ時期、ほかの業者によって開発された南星台、星田山手、妙見東といった地域でも、松下電器OBが多く事情は同じでした。

妙見坂の土産用竹炭はひとつの例ですが、地域の人たちが共通の目的をもって竹炭焼きに参加すれば、里山を守るという運動に加え、町の活性化につながると思うのです。

私に竹炭焼きを勧めた有井さんも同じ考えを持ち、彼は、市議会議員の立場から、そうした地域の活性化に向けて適切な助言や支援活動を盛んに行っていました。

四つ目は、来る人を拒まず、そうして炭焼き集団を誇りに思えることです。交野の里山を守りたい人なら誰でも大歓迎。しかもボラ

ンティア集団では、皆、横一列で、縦社会的な身分差はありません。だから扱いは、皆、平等です。誰がどんな意見を述べてもかまわない。発言は自由。その上で、ひとりひとりが達成感を持てる…そんな環境をつくらないと、誰も「ただ働き」などしてくれないと思うのです。そうして、願わくは炭焼き集団が社会に認められ、尊敬されることです。そうなれば、多少きつい作業であっても、多くの人たちが、われわれの炭焼き集団にとどまってくれてくれるにちがいません。

楽しい竹炭づくりボランティア発足

二〇〇二年四月、私が支部長を仰せつかりました。地区委員になって四年、ほんとうは、初心の小説に戻りたいのですが、竹炭づくりが目的のつくまで、そうはいきません。

前年発足の「竹炭づくり同好会」を「竹炭づくりボランティア」と改め、会長は星田山手区長で三洋電機OBの滝本さん、全体を指揮するリーダーは田端さん、メンバーは松愛会員が中心ですが、希望者は市民も歓迎ということにしました。田端さんは、早速、毎月定期的に竹伐採と炭焼きに取り組む意欲的な半年の計画を作成し、

実施の運びとしました。

同じころ、発足直後の「竹炭づくりボランティア」の第一回取り組みがはじまりました。人集めと楽しい雰囲気づくり名人の内野さんにお願ひし、彼の住む星田山手地区が担当です。第一回は、にぎやかにオープンしたかったです。楽しい様子を写真に撮り、その年の一月に開いたばかりの交野支部ホームページに掲載し、PRするつもりでした。

竹伐採の朝、内野さんは、総勢一八名もの大部隊を率いてやってきました。松愛会会員六名、自治会の方七名、会員の奥様など五名です。私の理想と考えるメンバー構成です。

技術的な指導は、田端さんが当たるのですが、二時間もすれば一六メートルの竹が軽トラック二台分も伐採でき、奥様方は、竹の花瓶やプランターづくりに挑戦していました。

一週間後、窯入れと予備焚きです。この日も、前回同様の多人数参加で、人手の必要な竹の定尺切りと四つ割り作業も難なく終わり、予備焚きに入りました。予備焚きは、二、三名でよいので、ほかの皆さんは帰りましたが、奥様方から、昼食やビール、焼き芋用の芋の差し入れなどがあり、ご近所のありがたさが身にしみえます。翌日の本焚きにも、再三、差し入れがあり、日ごろは静かな窯のまわりに、にぎやかな歓声があがります。

一週間後、窯出しと会費制の打ちあげです。炭は上々のできあがりです。窯出しが終わると、初日から参加した二十名あまりが、窯のある星の里いわふねのバーベキュー会場でバーベキューをします。食材は奥様方があらかじめ調達・調理して持ち込み、燃料は出来立ての竹炭です。ビールを一缶飲んだころ、炭焼きの会は、ご町内の懇親会と化しています。解散時には、一回は参加したが当日不参加のひとの分も含め、竹炭一キロをお持ち帰ります。市販では、百グラム約百円ですから、結構な金額のお土産となります。

こうした竹伐採から打ち上げまでの様子を、楽しい写真とともにホームページに掲載し、竹炭づくりボランティアの楽しさをPRしました。名人内野さんの努力と星田山手地区の皆さんのお陰で、楽しく、にぎやかな第一回竹炭ボランティアがお手本となり、後々、こうした和気藹々の雰囲気、われわれの炭焼きの特徴となってきました。

家庭的で楽しい雰囲気は、一度参加すれば、その味が忘れられないのです。

好調にすべりだしたのに、窯が…

竹炭づくりボランティアは、他市からの参加もあり、順調に回を重ねていました。

古賀さんのもとでしっかり基礎を学び、贈呈用という本番もかね、竹炭焼き工程のサイクルも何度か試みたお陰で、私たちは短期間でかなり腕をあげ、集まったボランティアの人たちに無駄や手待ちがなく能率よく作業してもらえ、かつ、そこそこの竹炭が焼けるまでになっていました。奥様方など地域の方々の差し入れ、なごやかな歓談、バーベキューによる打ちあげなど、アットホームな雰囲気も、一応、定着してきました。

そんなあるとき、思わぬアクシデントがもちあがりまして。密閉のあと、排煙口の温度は、日を追って百度ずつさがるはずなのに、その窯の場合、三日目になっても二百度近くあり、常温まで下がらないのです。

窯出しの日、思い切って開けてみることに、密閉土を叩き落して鉄扉をひらくと、窯いっぱい竹炭は、新鮮な空気を浴びるやいなや、一気に真っ赤に熾りはじめました。一週間まえ、密閉されて酸欠となり消されたはずの小さな火種が、空気の流入によって勢いよく煽られたらしいのです。窯のどこかに亀裂がはいつたか、

密閉の仕方がわるかったか、いずれにしても、密閉後、空気が完全に遮断されていなかったらしいのです。

すぐ鉄扉を閉め、機密性を慎重に調べながら再密閉すれば、あと三日も経てば、少しは灰になって失われても大部分は炭で残る

そう思っていますと、どこからか「水、水」という声が聞こえ、気づいたときには、窯はもう水浸しになっていました。

その一瞬で、その窯を担当した地域の人たち約二十名の、二週間にもわたる働きが、ふいになりました。自分たちの汗の結晶を待ちわび、窯出しに折角集まった人たちをがっかりさせてしまいました。私は、一人一キ口のお持ち帰り分は、かならず、次回の窯でカバーすると声を大きくして約束しました。

ずぶ濡れの竹炭をとり去ったあと、私たちは、窯の内外の亀裂、とくに目には亀裂と見えないけれど、わずかな空気の流出があつて、どこかに排煙の茶色い跡が残っていないか慎重に目視し、あれば密閉土を塗って補修しました。何度かの経験から、そうした亀裂は、地面と窯裾の接合部分、焚き口の鉄扉と窯の接合部分、焚き口の耐火煉瓦と窯の接合部分など、熱膨張率の異なる二つの部位で起こるのを知っていました。

補修のあと、慎重を期して機密性を確認することにしました。簡単に口焚きの火を燃やして密閉し、つぎ、窯入れのとき、密閉した

鉄扉を開いて立ち消えしておれば、機密性が大丈夫と判断することにしたのです。でも、どう補修しても窯の老朽は明らかでした。

窯の救い主、梶さん…

「竹炭づくりボランティア」発足の恩人をあげると、第一が有井さん、第二が古賀さん、第三が梶さんといえます。梶さんは、当時、星の里いわふねの所長でしたが、古賀さんが転勤したあと、直接、こまこまと炭焼きの面倒をみてくれました。

ぶらりとよく炭焼き小屋に姿を見せましたが、彼は、私たちの作業ぶりに好感をもっているようでした。窯入れのとき、竹を切ったり割ったりすると、おが屑や細かい竹片などが一面に散らかるので、作業が終われば、たちまち箒の目もあざやかに掃き清めます。作業のあと、無人となった炭小屋は整理整頓が行き届き、火気など一切ありません。おまけに、炭焼きあとの窯の補修はとくに入念で、窯への愛着さえ感じさせるのです。私たちに、こうした習慣が身についたのは、几帳面で誠実な田端リーダーの指導の賜物です。「かつてある団体が、この窯で炭を焼いていました。整理整頓は悪い、窯は使い放なし。見るに見かねて、一切、出入り禁止と怒鳴っ

てやりましたよ」

あるとき、梶さんは、私たちの作業姿を見ながら、ひとりごつのように呟きました。

同じころ、古賀さんに教わった炭焼き工程に、予備焼きと本焼きがあり、その本焼きも中断するのは非効率だと、私たちは一貫して徹夜で炭焼きをする形に作業を改善しました。そのとき、梶さんは、すすんで仮眠室を提供し、寝具まで貸してくれました。

「皆さんは、徹夜までして交野の里山を守るために炭を焼いている。それなのに、市が、窯の使用料をとるのは申し訳ない。無料とはいかないだろうが、何とかしたい…」

何度か、そんなひとりごとでも聞きましたが、ついに実現せずじまいでした。

炭を焼くたび、窯をていねいに補修して機密性のテストをする私たちの姿を見かねてか、梶さんが、あるとき、「年末・年始で炭焼きが休みのとき、窯を全面的にやりかえよう」と、窯の改善策があれば提案してほしいとってきました。

早速、関係者が集まり、窯と地面の接合点にクラックが入らないよう窯の裾にブロックをめぐらすこと、従来は、焼き口の耐火レンガを包む窯土が薄い構造のため、その部位にいつも亀裂が生じたので、それを肉厚にできるよう窯正面にブロックの壁を立てること、

しかも、窯の鉄扉とブロックとの間は適度に長くして外側に鉄枠を固定し、密閉のとき、熱い鉄扉を直接密閉するのではなく、外枠に一枚の鉄板をはめて密閉土を施す構造とすることなど、機密性が高い割には扱いが、安全で手軽な構造を提案したのでした。

梶さんは、煙突だけは、なぜか勝手に決めて発注しましたが、ほかは、すべて私たちの意見を聞いて改善し、以降、窯の心配はまったくなくなりました。梶さんの英断がなかったら、竹炭ボランティアは、窯がネックとなり前進できなかったにちがいありません。

思わぬチビッコの抗議看板

ごく初期の竹の伐採は、倉治といって窯から四キロばかりはなれたところでした。窯を一回焼く竹の量は約四〇〇キロですから、毎月一回焼くというふうに定例化して頻度が高くなると、運搬が大変になってきます。

そこで、早速、有井さんが、窯とは目と鼻の先に、交野市の所有地で恰好の竹藪があるのでそこにしようと、市の許可までとつてくれました。尺治川という川の堤防です。

有井さんと私のかかわりについて少し触れますと、その後も彼は、

竹炭焼きの提案者として、定例の作業開始と打ち上げ日には作業着姿で、大抵、参加していました。有井さんの挨拶ののち、リーダーの田端さんが、その日の作業予定を説明するのがならわしでした。私は、彼に敬意を表してあまり表にないようにしていました。そうしたなかで有井さんは、適切なアドバイスをくれるのでした。

窯のある星の里いわふねの、川と国道を隔てた隣の小高い丘に、私市小学校があります。学校の大きな敷地の片側は深い谷で、そこに前述の尺治川の清流があります。学校の敷地からその尺治川へくだる斜面に、苦竹が一面に生い茂り、荒地同様のありさまでした。私たちは毎月約四、五〇本の竹を伐採します。それも、一〇メートルを超える竹の密生を一本残らず切りとります。回を重ねるごとに、斜面はどんどん丸裸となって地肌がむき出しになり、荒地が広がっていくように見えます。私たちは、それを見、里山を守っている気分浸ったものでした。

ところが、竹伐採を翌日に控えたある日、有井さんが、伐採現場まで来てほしいというので行きますと、竹を伐採したあと地に、何枚かのダンボール紙の立札が立っています。

「大切なみどりをこわさないでください。私市小学校五年生一同」
「わたしたちの学校の竹を切るのをやめてください。私市小五年生一同」などと書いてあります。

有井さんがいうには、実は、校長から電話があつて、五年生のあくるクラスで縁を大切にするという授業にとりこんであり、どうしても看板を立てたいというので許可した、あとをよろしく頼む、とのことなのです。

「跡地に、桜や雪やなぎ、れんぎょうなどを植えて美しい堤防にすることを約束するので、看板を下ろしてほしいと、校長にかけあいましょう」

即座に、私がそう提案しますと、有井さんは目を輝かせましたが、翌日の間にあわないので、抗議看板のことは、校長との話が成立してからメンバーに公表することにし、翌日は竹伐採の時間帯だけ、一時、こちらで撤去させてもらうことにしたのでした。

竹は、雑木林を荒らすといつても、確かに、大切な緑に相違ありません。

五〇年、一〇〇年後も、美しい桜の名所にしよう

有井さんと二人で植樹構想を話しあい、私市小学校長には、彼が交渉にあたり、すぐに抗議看板はおろされることになりました。私は、松愛会交野支部のホームページに、「私市小学校のみなさんへ」

と呼びかけるページをつくり、竹伐採の趣旨や跡地への植樹計画の説明を掲載し、ぜひ、学校の皆さんで読んでほしいとお願いしました。

同時に、竹炭ボランティアのメンバーにも抗議看板の経緯を説明し、植樹のための跡地整備を、翌年の三月ころまでに行ないたいと協力を要請しました。

「子や孫の代のため、ここを五〇年、一〇〇年後も美しい桜の名所にしましょう。荒地の整備、植樹のあとの下草刈りなど、手間がかかりますが、よろしく願います」

少し強引と思いましたが、子供たちの緑を大切にすることに伝えよう、純真な気持ちを傷つけないようにしようの説明しますと、メンバーは積極的に賛成してくれました。

しかし、この抗議看板を通じ、私は、自分の稚拙さを大いに反省させられました。

第一は、伐採跡地をどうするか基本構想をもっていなかったこと、第二は、地元である私市小学校に伐採の趣旨などの説明を落としていたことです。もちろん、竹伐採に際し、事前に、有井さんを通じ、河川を管理する大阪府、土地を所有する交野市に許可をもらっていました。その先へ知恵がまわっていないのです。こうした活動で、側に公職者の協力の得られることが、どんなに

ありがたいか痛感させられました。志が立派でも、実績もない「松愛会交野支部長」の名刺一枚では、さしたる問題も起こさずに、こんなに早く事が運ぶことはなかったにちがいません。

植樹は三年計画。二〇〇二年度が松愛会設立三〇周年にあたるので、初年度は松愛会の事業、二年目からは竹炭ボランティアのそれとし、竹伐採のすんだ順に、毎年、桜一〇本、ほかに雪やなぎ、れんぎょうなどを各二〇〇本ほど植える計画としました。

桜は、翌年、すぐ花をつける木を植えることにし、早速、手配を有井さんにお願いました。費用は松愛会でもちます。雪やなぎ、れんぎょうは、交野市の農とみどり課にお願ひし、大阪府から大量に無償支給をつけることになりました。植樹の場所には、趣旨を記した大きい看板を立てます。文案は私、手配と費用は有井さんにお願ひしました。

「植樹式」と呼ぶ式典を行うことにし、中田交野市長をはじめ、地元選出で松下労組出身の平野衆議院議員、大阪府議会議員、交野市議会議員などの議員、および行政の関連幹部、松愛会会長などを来賓として呼ぶことも、有井さんと話しあいました。

大まかな構想を練ると、前回の轍を踏まないよう、早速、尺治川のある私市区の区長を訪れ、趣旨を説明して地元の了解をとったのでした。

「初窯」で竹炭ボランティアをPR

植樹式の来賓について相談しているとき、有井さんから提案がありました。

実は、成人の日、星の里いわふねの成人式には、植樹式に呼ぶことにした来賓が、皆、出席している。この人たちに、竹炭を焼く現場を見せられないだろうか、というのです。

迂闊にも、私は、星の里いわふねが成人式会場であることすら知らなかったのですが、即座に、「初窯式をやり、そのあと、竹炭ボランティアと来賓で賀詞交換会をすることにしましょう。ただ、当方の『初窯』は『釜』ちがいの『窯』ですがね」と答えました。

このときも、有井さんの存在に感謝の気持ちでいっぱいでした。早速、役割分担を決めます。段取り一切はこちらでやるので、有井さんには来賓へ案内状を配ることをお願いしました。

大変なのはリーダーの田端さんです。新しい取り組みを、有井さんと私がどんどん決めるので対応に大わらわです。

でも、彼が過負担にならないよう、来賓用の案内状は、私がつくって必要部数プリントして有井さんに渡します。同時に、文案を田端さんにメールし、ボランティアメンバー用にアレンジして使ってもらいます。「初窯式」のやり方は、友人の神官に相談し、備品や

司会の運びはあらためて相談することとします。賀詞交換会の料理、飲物、会場の手配などは私がやるので、当日の指図、司会などを田端さんにお願いといたった具合です。

新年には、ちょうど梶さんが努力してくれた窯の改装も完成しますので、その披露もかね「初窯式」を行うことにし、友人の神官に、「安全祈願とボランティア活動の弥栄祈願」を頼みました。生憎、日程があわないといえますので、真似事だけでもしたいから、やり方を伝授してもらえないかといいますと、電話の向こうで、彼が一喝しました。

「神を冒流するようなことをいってはいかん。神事を行えるのは神官だけです」

それも道理だと、田端さんと相談し、素人なりに聖域を示すために窯小屋の四角に笹を立てる。まず塩で、その四角と窯を清める。そのあと、そこに、お神酒と饌米を供える。そうして窯に向かい、全員が二礼二拍手一礼する。そうして、炭焼きの準備の整った窯に中田交野市長が「初窯点火」する…といった「初窯式」を考案しました。

当日は、竹炭ボランティアメンバー六十余名と来賓二十余名の盛会となりました。とくに前年の九月、妙見坂自治会館落成式の際、土産に「交野竹炭」を贈った来賓がほとんど「初窯」参加で、「あれ、

ここで焼いたのか」と関心が集まりました。おまけに、ほとんどの来賓とはその折に名刺交換していただきましたので、賀詞交換会を通じて親近感が増し、後に担当することになる交野市観光協会の仕事のベースの人間関係が築かれたのでした。

桜の名所づくりは、大変

みんなの手で 五十年 百年後も美しい

桜の名所をつくりましょう

いま、交野の山々では竹林がはびこり、雑木林が枯れようとしています。わたしたちは、その竹を切って作った竹炭で天の川を浄化するなど、豊かな里山と清流を子孫に伝える運動をしています。

今回、竹林を切り開いた尺治川堤防を桜の名所にしようと緑化にとりくみました。幸い、この川が天の川に流入する所には、一八九九年、オランダの砂防技師ヨハネス・ゲレーテの指導によって作られたという伝承の府下最古の砂防設備「どんど」(石積みによる堰堤)があり、現在、この史跡を残す「天野川水辺プラザ」の工事も進められています。また、南接する私市惣墓地には、やはり府下最古の「弘安地蔵」(一一一八年建立)があります。

みんなの手で、いついつまでも歴史ある交野の自然を守り育てましょう。

二〇〇三年三月

松愛会 交野支部

交野・竹炭づくりボランティア

植樹看板の文案は、前載の通りでしたが、有井さんの提案で、「後援」に、天の川を美しくする会、交野市、私市区、交野市教育委員会、私市小学校の名を連ねました。

しかし、桜の名所づくりは大変です。一年目の植樹面積は、ただ幅一〇メートル、長さ五〇メートルくらいですが、長年放置された土地で、繁茂した笹、蔦を除いたあと、竹の根は抜きませんが、大きい石、がらくたの類を除去せねばなりません。毎回、四十余名の会員をはじめ、区長など私市区の人たちも参加、連続四週、草刈り、土地整備、穴掘り、事前植樹などの作業を行い、田端さんも有井さんも私も、先頭に立つて働きました。

桜の苗木も大変でした。深い穴を掘っておいたら、あとは、業者が支え木を組み立てて苗木を縛るので、搬入時、立ち会ってほしいとのことでした。田端さんと二人で待つと、業者はたった二人。一本、二〇〇キロはあるつかという土つきの苗木を、十本、トラックから二メートルのフェンスを越して尺治川の傾斜地へクレーンで下

したり、斜面を四人で、苗木を一本ずつ穴まで担いだり、木の向きを正すため、指示にしたがい何度も持ちあげて苗木を回転させたり…。雪やなぎ、れんぎょうも、計四百本は当日だけでは無理だろうと、事前に植えられるだけ植えようということになりました。

発端となった私市小学校にも参加要請しましたが、休日で、学校行事とはできないとのことで、結局、看板を立てたクラスの担任の計らいで、「ユニセフ」用にと農作物を売って作った資金の一部を寄付され、学童約二十名が自由参加で苗木を植えました。

植樹式のあとは、例によって来賓も含め百余名で、バーベキュー懇親会をひらきます。

毎年、花の成長を見守る 「花見会」

植樹まで時間の余裕はあったものの、当初予定にはなく、小学生の抗議看板からの思いつきにかかわらず、皆さんはとても協力的でした。四週連続して約四〇名の人たちが熱心に作業されたことに、ただ感謝の気持ちでいっぱいでした。

植樹式のあと、バーベキュー懇親会の挨拶で、こう宣言しました。「来年から毎年、今日、植樹の日が三月八日ですから、その一カ月

あと、四月八日と日を決め、年々、桜の大きくなるのを見ながら花見の宴をひらきましょう。花の成長を見守りたい人は、ぜひ集まってください。心いくまで花を愛でながら美酒を酌み交わしましょう」

リップサービスではありません。初窯と植樹式に出席の来賓を、毎年、初窯と花見会に呼ぶことを定例化しようと思ったのです。

この二つに参加しさえすれば、誰でも、気軽に、交野市長や市の幹部、平野衆議院議員や府議会議員、市議会議員、そうして主だった区の区長などと歓談できる場にしたかったのです。

竹炭ボランティアは、とくに夏場は厳しいけれど、また、植樹あとの下草刈りや施肥は大変だけれど、この団体に属しておれば、年二回、そうそうたる来賓と歓談の場があるし、ほかではえられないそんな機会があること自体、一応、社会的に認められた団体であればこそと、メンバーが自らを誇りに思えるにちがいないと考えるのです。

ご苦労かけている分、花見の酒宴は、すてきなねざらにはちがいありませんが、竹炭ボランティアという集団に誇りをもてることは、もつとすばらしい報酬だと思っております。

平安時代、交野が原は、花見と鷹狩りの名所で、京の都から多くの貴族が訪れるのですが、平安後期から鎌倉初期の歌人、藤原俊成は、こんな和歌を残しています。

またや見ん 交野のみ野の桜がり 花の雪散る春のあけぼの

一読して交野での観桜は相当印象深いものであったと思われるますが、それに因んで花見の宴をやるとうというのです。それにしても、俊成の桜はどのような種だったのでしょうか。

実は、植樹のとき、有井さん、農とみどり課の三宅さんで桜を相談しました。三宅さんは「交野桜」といいました。前々市長の原田さんがこだわってあちこちに植えさせました。しかし、大木となる山桜で花は小粒、枝はまばら、俊成の風情などまつたくありません。結局、ソメイヨシノとなったのですが、その後も、俊成の桜の種はわからずじまいです。

さて、公約から一年経ったとき、私は、最低でも一〇〇人に無料で酒宴を楽しんでもらおうと、例えばパナホームさんに、PRのテントを許可するかわり、寄付をお願いするなど東奔西走しました。山野酒造さんにも一斗樽を寄付してもらいましたが、そのときの恩返しにと、いまでも清酒の購入は、山野酒造の純米大吟醸一本に絞っています。

天野川の水質浄化

有井さんがもっとも取り組みたかったのは、天野川の水質浄化でした。毎月、約一〇〇キロの竹炭が焼け、蓄積量が増えてきますと、彼は、私を急ぎ立てます。私は、寮も改装できて軌道に乗ったとき、植樹に手をとられたので、仕事の拡大は無理と感じていました。

彼の構想は、天野川上流と、汚染の進んだ支流のいくつかに竹炭による浄化装置を取り付けることでした。そうして、試験的浄化を、妙見川という支流の天野川流入口でやってみたいのです。そのころ、竹炭の効能が、まるで「魔法の炭」のようにもてはやされ、浄化にえば一挙に効果がでるといった信仰さえ生まれていました。私は、組織に負荷をかけたくないので、牽制も含め、いま水質浄化に取り組むのなら、天野川の現状と浄化目標を明確にし、竹炭について、試験的な浄化によって効能をはっきりさせ、天野川の浄化に竹炭が最適というなら、ぜひ、やるうといいました。

私の思いは、単に牽制だけでなく、松下電器 中央研究所に化学分析センターがあつてそういうテーマもこなせるはずなので、知合いの所長に、無料で分析をかけたのですが、断られたのです。科学的な取り組みができないなら、当面、パフォーマンスでも仕方ないと判断し、竹炭の提供と入れ替え作業は約束するので、

浄化装置の制作、取り付け、川の利用申請は有井さんがやってほしいと頼みました。

しばらくして頑丈な鉄製の浄化装置がもちこまれ、数名が力を貸し、専門家に取り付けてもらいました。しかし、つぎの増水で見事に流されたので、さらに頑丈な枠で固定しました。それでも、つぎの大雨で蓋が流され、また改良が加えられました。

台風の大増水にもびくともしない浄化装置はできたのですが、装置通過前と後の水質の定点観測が、いまだにできていないので、宝の持ち腐れと惜しい気持ちでいます。

そのころ有井さんは、執念を燃やして某所などに別の浄化材による試みを行いました。

二〇〇六年七月、「天野川生活排水対策連絡会」事務局の大阪府環境農林水産部課長補佐の柳川さんが、天野川を視察された折、偶然、その某所に案内して事情を説明しました。すると川下で何かを拾う女性の姿が目に入ったので、確かめると、バケツに半分ばかりシジミを採っていました。そしてあたりには、タニシやカワニナが、川床が真っ黒になるほどにいます。有井さんの試みから三年目ですが、柳川さんが目を丸くしていました。

「これはすごいです。浄化が効果をだした証拠です。何が何個いるかを、ぜひ、定点観測してください。水質浄化の生物指標といって、

これも大切な資料となります」

天野川の水質浄化に取り組むのなら、交野市には水質データがあるので、どこでどのように行う浄化が効果的か、一度、行政といっしょになって企画したいと思っています。

竹炭の品質水準 森賀さん、百田さんのデータ活用

炭焼きのコツもまだつかめていないころ、口うるさい森賀さんが枚方市から加わります。内野さんが誘ってきたその日から田端さんや私に理屈を披瀝します。こうした「識者」は多く、教えを乞うふりて質問を繰り返すとすぐ馬脚が出るので、あとは相槌をつつに留めるのです。森賀さんは違いました。大抵の「識者」は、技術論をぶたれるのですが、彼は、「良い炭を焼くには、竹材の品質、量と、焼く温度、時間を定量化しなければならない」「そのためには、必要項目を決めて、毎回、データを記録、収集し、分析しなければならぬ」などと基本論をいいます。いちいち筋が通っています。炭焼きの経験をききますと、ないが、むかし松下電器の中央研究所で炭化の研究をしていたといいます。

品質安定のため、そうしたデータの必要なことは、折にふれ、

田端さんと話をしていましたので、私は、彼に必要と思う項目を選定してほしいと頼みました。

同じころ、飄々とした、もう一人の男、百田さんが加わりました。森賀さんのように議論をしません、誰かの尻馬に乗った顔して、正論を端的にさわやかに吹きかけます。

例えば、今回の炭の出来、不出来が議論になった場合、彼は黙って今回と前回の炭のサンプルを持ち帰り、次の日、電気伝導の計測結果だけを示し、あとは何もいわないのです。

そうこうするうち、百田さんは、毎回、窯出しのとき、窯の前中、後ろ、それぞれの位置の左右と中央、計9種のサンプルを持ち帰って電気伝導を測り、彼なりの評価によるABC級品の比率を、窯の位置、および全体でしめしてくれるようになりました。

炭焼きは七つの班持ち回りですが、自分の焼いた炭を評価されるのは、いやと思うらしく、彼の評価を真剣に受け止め、つぎの改善の議論に発展したことはありません。

一方、森賀さんは、竹の種類、伐採日、乾燥期間、炭焼き中のシッターの開閉度合、窯温度の推移など約三〇項目を作成し、毎回、データを取り、百田さんのデータと比較分析しやすい資料としてくれます。これを徹底的に分析検討すれば、百田さんのいうA級品は簡単に焼くことができると思うのですが、そこまでは誰も追求しよ

うとしません。

しかし、少し考えてみると、炭焼きの目的の第一は里山の保全ですし、竹炭の用途も、水質の浄化用、バーベキューの燃料用が中心、あとは知人に「交野竹炭」を頒布する程度であれば、あまり口角泡を飛ばす必要もないのかもしれない。同じ意味からして、竹炭の多孔質性の測定方法の追求、竹酢液の組成分析なども、十分に組み合っているとはいえません。それにしても、組織とは、基本は田端さんのように几帳面、誠実で、普段は内野さんのように楽しく少しアバウトで、しかも、炭を焼くときは、森賀さん、百田さんのように、シビアなデータにもとづいて…とはいかないものでしょうか。

ボランティア市民活動資金支援プログラム

松下電器には、社員とOBのボランティア活動を資金面から支援する制度があります。ボランティア市民活動資金支援プログラムです。

社員またはOBが属している団体に対し、一件当たり二十五万円まで、年一回、最高五回まで支援資金が支給されるのです。一九九八年に設立され、保健医療福祉、社会教育、芸術文化、スポーツ、

地球環境保全、人権擁護、男女イコール参画社会づくり、国際理解協力、災害援助、子供の健全な育成、まちづくり推進、NPO、NGOなどの団体を対象とするもので、二〇〇六年までに五八九件、計一億三二七四万円の援助が行われました。

OBについては、松愛会が受付、審査を行い、松下電器へ申請します。毎年、約三〇件、松愛会から申請し、認可されています。ちなみに、二〇〇六年、交野支部関連では五件の認可があり全国最高です。

さて、二〇〇二年四月、正式に竹炭づくりボランティアが発足し、毎月一回、定期的に活動するとなると、竹切りノコ、ナタ、ヘルメット、ロープ、また、そうした機材を入れる現地の物入れなどが必要になります。参加者が増加してくると、買い増しも必要です。少し後になると、竹酢液をそのままでなく蒸留しようということになり、そのための費用も必要になってきます。

早速、田端さんに申請していただくと認可されるのですが、実に、ありがたい制度だと感謝の気持ちでいっぱいです。

表題からは少しそれるのですが、支援ということでありがたかったのは、星の里いわふねに、短期アルバイトとして営繕関係で勤務されていた方々の好意でした。

あまりに多くの皆さんのお世話になったので名前も出てこないの

ですが、五反田さん、加門さん、田中さんといった方々には、正式に所長に申請するまでもない窯小屋の造作を、雨風や寒風遮断の塀や庇、竹材乾燥保存の雨対策、機材保管場所の確保、長椅子制作など、ときには、水道や電気の基本設備まで、古材や間伐材、ときには新材などを使ってやっていただきました。あまりの不便さ、不快さで積極的な気持ちが萎えるということは、まったくなかったので、それは、この方々のお陰で、竹炭づくりボランティアの第四の恩人をあげるとすれば、まちがいなくこの方々になると思います。

ありがたついでというのも誠に失礼なことなのですが、私市の辻さん、山本さん、河村さん、松尾さんには、有井さんの時代からの変わらぬよしみで、いつも農業に使う軽トラで竹材を運んでいただきました。簡単なことのようにですが、サラリーマン家庭ではほとんど軽トラなどありませんから、大いに助かりました。

「お前ら、ほんまに環境保護の団体か」

何度か述べましたように、きつい竹炭づくりを支えるボランティアの皆さんの、少しでも力になりたいと、私は、竹炭ボランティアの評価をあげる努力をしてきましたが、一番の危惧は、その評価を

とりちがえ、僭越横暴な振る舞いをするメンバーがあらわれなかった。ある成人式の日、その心配が現実となりました。

もともと、成人式と「初窯式」は重複して企画しました。しかも、われわれの窯へは、開式を待つ着飾った若者がいっぱいに群がる式場前を通らねばなりません。そこで、式が始まって若者の姿が会場に消えるまで、そこは通行禁止、しかも早朝以外、駐車場も使用禁止の措置をとると、星の里いわふね側と申しあわせていました。

ところが、規制を知っているはずのある会員がそれを破って職員とトラブルになったのです。「おれは、竹炭ボランティアの者や。ここを通って何が悪い」と叫んだそうです。

それを後から耳にし、逃げ出したい思いでした。案じた通り、翌年、「初窯は成人式以外の日程で実施してほしいと交野市側から強い要請をうけます。それを覆すために、竹炭ボランティアの名声を逆利用するのですが、そのような汚い手は二度とごめんです。

また、いつごろからか、炭焼きのとき小屋の前のドラム缶で焚き火する癖がつかえました。冬は暖をとるため仕方ないとしても、夏も火を消しません。おまけに、差し入れの包装のビニール袋、発泡スチロール類なども、平気で投げ入れます。

一度注意せねばと思っていました。が、気まづくなるのを恐れ、ためらっていたのです。すると、あるバーベキューの打ち上げの

とき、案じた事態が起きました。われわれの大きいバーベキューコンロに、誰かが、ビニールのレジ袋を束ねて燃やしたらしいのです。一般来場者で、隣でバーベキューを楽しんでいた家族づれの若者が、見とがめて注意したそうですが、燃やした人が素直に聞かなかったようです。いや、おそらく公の会場をわがもの顔に振舞うわれわれの態度を、横目で、苦々しく思っていたにちがいありません。

「お前ら、それでも、ほんまに竹炭を焼く環境保護団体か…」激昂して殴りかかろうとする若者との間に、誰かが止めに入ると、今度は、その胸ぐらをつかみ、

「お前ら、一体、何様やね。恥を知れ、恥を…」と、ますます手がつけれません。

「ありがと。注意を受けて申し訳ない…」と、大声で私が若者にぐいと詰め寄り、名刺を渡し、全員に聞こえるように叫びました。

「私は、総責任者です。注意しているつもりが、日常の行いが表に出た結果だと思う。恥ずかしながら、平素、ビニール袋や発泡スチロールなど燃やすことはないか、もう一度、原点から、ぜひとも注意したい…」

このときほど、自分の逡巡を恥じ入ったことはありません。

炭焼きの担当は、どんな編成がよいか…

先にも少し述べましたが、私には、竹炭づくりは、地域ぐるみでやりたいという思いがありました。最初からそれを強調すると、炭焼き自体の推進が鈍っては困るので、拘らないでおこうと決めました。

単に竹を伐採し竹炭を焼くだけなら、必要な人手が確保できるように支部をいくつかに分割すればよいのです。竹炭づくりボランティアを地域に密着した活動とし、その活性化に役立てようというなら、担当の編成はまったく異なってきます。誰に参加してもらってもちがってきます。地域の人が中心なら、松愛会の看板は小さくせねばならないでしょう。

私としては、交野はまだまだ里山が多くて美しい田園風景が残っている、松下電器OBが起爆剤となるが、地域の人たち、とくに農家ではない高齢の人たちの楽しみとして炭焼きが定着すればよいと考えていたのでした。ゲートボールを楽しむように、町々で、竹炭焼きを楽しみ、健康づくり、コミュニケーションづくりの核になればと願っていたのです。そんななかで、小中学生の夏休みの体験学習などができればよいとも思いました。

そのような思いで、最初は、田端さんをお願いして竹炭ボラン

ティアの実施日を交野市広報に発表し、一定人数、市民参加を募ったのでした。

尺治川堤防の植樹を見ても、まだまだ一部ではありますが、地元ということでは私市の皆さんも、よろこんで参加しました。元私市区長の井上信夫さんは、私にこういいました。

「あの世に行ったとき、わしは、ご先祖さまに大きな顔できますわ。わしが区長るとき、墓地裏の荒地を、皆さんが、花盛りの堤にしてくれましたからな…」

妙見坂もよい例の一つですが、自治会館落成式の土産用といえば、トライがはじまったばかりなのに、町あげて炭焼きのボランティアの人が多数集まりました。

少し込みいった話になりますが、当時、松愛会交野支部は、七班で運営されていました。一つの班は、ほぼ五、六〇名で、松下電器OBの密度の高いところは、一つか二つの町を一人で担当することになります。妙見坂、南星台、星田山手といった地域です。密度の粗いところは、いくつもの町を広域に束ねて担当せねばなりません。「竹炭ボランティアを地域ぐるみで…」と行って取り組むとすれば、松下電器OBの多い地域、そうでない地域、そのどちらが有利か

一見、松下電器OBの多い地域が有利のように見えますが、最初、OBの多い星田山手地区で内野さんが集めたのは、OB六名、自治

会員七名、奥様五名でした。ずっと後のことになりますが、倉治の青山さんは、竹炭に参加して妙見坂、南星台などの取り組みに感化され、OBのほとんどいない倉治地区で地域活動を活発化させる核となっっています。

有井さんの残したもの（一）

有井さんは、二〇〇四年一〇月三〇日、主宰する「天の川を美しくする会」の十周年記念式典で自らの活動報告演説中に倒れて人事不省となり、一二月、帰らぬ人となりました。享年五十五歳でした。竹炭づくりボランティアも、彼の残したもののひとつですが、ここで、足跡をたどり、彼の残した「まちづくり」について少し考えたいと思います。

妙見坂地区まちづくり委員会（一九八七年発足）

一九八三年、三十四歳で初当選した有井さんが、一期目最後の年に手がけた仕事で、その後の議員活動のベースとなりました。先述のように、ここは六〇年代後半、松下電器が従業員のために開発した住宅地で、最盛期で約一〇〇〇戸、一自治会を構成していました。リーダーシップをとっていたのは中村泰彦さん、瀬越 晏さんで、

戦後日本の労使関係の主流が、「対立下でスト権など力を背景に賃金

要求・獲得」の時代に「協調下で政策提言と参加による総合的労働福祉政策」路線へと、松下電器の労使関係を大きく転換させた先駆者です。ちなみに私が松愛会へと口説かれたのは中村泰彦さんでした。

有井さんが、彼らと一緒に労働組合活動をしたことはありませんが、労組OBの彼らの薫陶を受け、「市民参加による市民提案型の行政のありかた」をバックボーンに据えるようになったことは、想像に難くありません。

「妙見坂まちづくり委員会」は、一九八五年、交野市が「交野市総合計画策定」の一環として地域市民による「まちづくり委員会」の支援を条例化したのに応え発足したものです。

同委員会は、山を開いてできた不便で物騒な宅地を便利で安全な町にするため、「生活基盤整備の取り組み」として、「防犯・環境照明」「下水道の整備」「バス路線と道路の整備」などを交野市に提言し、実現させていくのですが、有井さんは、その政策提言に加わって行政とのパイプ役として活躍したのです。

「参加型提言」の一例をあげますと、一九九七年、交野市が、この町を通る「星のみち」約五〇〇メートルの舗装拡幅工事をしたので

すが、植栽の計画がありません。同委員会は、それを申し入れる代りに、年一回、剪定・除草・施肥を負担しました。以来毎年、私も一市民として、春秋の年一回、道具持参で、剪定、除草に参加しています。

同委員会の取り組み例をあげますと、自治会館の利用は、二〇〇六年、延四〇八二時間（一室・一時間約百円）ですが、管理人は無償ボランティア約三〇名が交代で務めます。アルミ缶リサイクルも手がけ、ボランティアが車で回収・プレスした量は、二〇〇六年、約三トンでした。二〇〇五年、自治会館としてはわが国初の、一〇KW級太陽光発電を設置し、自治会館の年間消費電力量二二〇〇〇KWHをまかっています。

有井さんの残したもの（二）

天の川を美しくする会（一九九四年発足）

有井さん、議員生活二二年目の仕事です。交野市を、天野川という川が流れています。桓武天皇が、都を長岡京に移すとき、現在の枚方と交野をさす「交野が原」で「天壇の祭り」を行いました。以来、平安貴族が、ここへしばしば花見や鷹狩り訪れ、天野川を、天

上の天の川になぞらえ、中国から伝わった七夕伝説にちなんだ和歌を数多く詠みました。

狩暮らし 柵機つめに宿からむ 天の川原に われは来にけり
在原業平のこの和歌は、平安貴族が天の川で風流を楽しんだようすをいまに伝えます。

宅地化などで汚れるのを防ぎ、美しい天の川の自然と古い歴史を子孫に伝えようと、年一回の清掃と子供親水行事を目的に、この会は発足しました。参加団体も当初の七団体から年を追って二〇余団体までになります。彼は、天の川の水質浄化にも、深い関心を示し、いくつかの試みを行ないます。時代が移ると、川を守るには森林を守るという考えが一般になり、彼が、私に、竹炭づくりを勧めます。当初から、竹炭づくりは、里山を守ること、天の川の浄化が目的でしたが、竹炭が大量に焼けるようになると、彼は、浄化に力をいれます。妙見阪、そしてつぎに述べる妙見東、星田山手、南星台は同会の所属一団体です。

妙見東 「星の池公園」の取り組み（二〇〇二年七月オープン）

開発されて三〇余年、親の世代は遠くに懐かしい故郷があったように、子や孫にとってこの町が思い出の故郷であってほしい、そんな親の世代の願いが集まり、「星の池公園」や「夏祭り」の取り組みがはじまりました。2年間で計12回、延べ約一七〇〇名の住民の

皆さんが、木と雑草の繁茂する約一万平米の調整池を、花壇の美しい星型池の公園に変えました。有井さんは、その指揮をとった当時
の下中区長の相談や具体的支援をしました。

星田山手 「SFゴルフ会」(二〇〇一年 第一回開催) S:ス
ター F:ファミリ

松愛会の地区委員になったばかりの内野さんに、町ぐるみのゴルフ会を開いてほしい、それが基盤になりもろもろの活動ができると、有井さんが頼みました。人集めと楽しい雰囲気づくりの達人内野さんは、いままもSF会を続けています。事実、竹炭ボランティアの初期、SF会の縁で、星田山手からは松愛会以外の人が多く参加しました。

南星台 「ほたるの里まちづくり」(一九八二年ころ開始)

有井さんは、一九八八年、私市山手地区まちづくり委員会を発足させ、テーマが「蛍を飛ばそう」だったことから、独自に同じ活動をする中村区長と共同歩調をとりました。私市山手地区では、自然条件が不適ということもあり成功しませんでした。南星台では、現在、一夜、最高900尾の蛍が飛び600人の人が訪れ、世話係は大わらわです。

市民みんなの森をどう生かすか…

植樹がすんだ年の二〇〇三年七月、もともと広くなかった尺治川堤の竹を取りつくし、つぎ、「市民創造の森」とよぶ里山へ伐採の本拠を移します。この小高い丘も交野市の所有地で、市の事情をよく知る有井さんが手配してくれました。

彼によりますと、「市民創造の森」は、道を挟んだ飛び地、「整備推進ゾーン」三・二ヘクタール、「自然保全ゾーン」四・四ヘクタール、「保全整備ゾーン」〇・八ヘクタールからなり、私たちは、「自然保全ゾーン」四・四ヘクタールの竹伐採を手がけるのです。しかも、市は、伐採跡地利用も考えているので、一応、念頭にいられておいてほしいというのです。

前回の抗議看板の例もあるので、早速、山を見て歩き、構想を練りました。地元の話では、山裾にあった小さな竹藪が放置され、五〇年かけて頂上まで登ったといえます。

なるほど、うつそうと茂る高さ約二〇メートルの孟宗竹の上に、細く背の高いミズナラの木が、約二〇本、顔を出している以外、竹に埋もれた松、杉などは皆枯れています。竹をすべて伐採すれば、大きな禿山が残るイメージです。

そこで、「星田山千本桜」というプランを有井さんに話しました。麓から頂上にかけて、開花期の異なる桜の木を、早いものから遅いものへと順に帯状に植え、一カ月間花見の楽しめる桜名所を作るのです。なぜ桜かといえば、「またや見ん…」の俊成の和歌が、「交野といえは桜」と教えているからです。

桜の苗木は約四〇〇本、予算四〇〇万円。低木（雪やなぎ、れんぎょうなど）二〇〇〇本、大阪府から提供。チップパー一台、予算一〇〇万円。これは、竹をチップにして網袋に詰め、伐採跡地に敷きつめると下草が生えず草刈りの必要がなくなるからです。また、伐採した竹の根元の土中にチップを埋めると、発酵して高温となり、筍が出ないといえます。

これを、世話をできるだけしないやり方で、竹炭ボランティア、有井さん率いる天の川を美しくする会、この山に隣接する南星台まちづくり委員会でやってはどうか…。

有井さんは、深い関心を示し、つぎ会ったとき、予算さえ何とかすれば実現できるといい、私も知るある団体に支援を要請しました。その半年後、ダメの返事が届きます。

しかし、返事を待つ間、この話は私と有井さん以外誰も知らないはずなのに、私に、南星台からいろいろの風評が届きます。彼が、誰かに話したに違いありません。

山は、自然のままがよい。園芸種の桜を植えるなど、もつてのほか。

桜の名所ができたら、ゴミと車があふれ風紀が悪くなる、誰が面倒みるのか。

桜はいかん。もともとの雑木林に返すべきだ。どんぐりの苗木を育てるのだ。

私は、いちいち、もっともな話だと思いました。

自然と人、共生の里山づくり

風評を聞いたとき、私は、このプランは断念しようと思いました。

第一、資金がありませんし、真意が伝わるまえに風評がひとり歩きすると、誤解を招くと思います。

いま、里山が荒れるのは、薪を採るなど昔のような日常のニーズで世話をしなくなったからで、問題は、どんな植生の山にするかの議論より、新しい実用価値をつけるなどし、どんな運動体の山として自転させるか、だと思っただけです。それも可能なかぎり、実用価値や楽しみ、参加の誇りが必要です。早い話、秋、栗拾いのできる山でもよいのです。

少しあとの例ですが、尺治川では、二〇〇三年七月現在、下流から約二五〇メートルの左岸の竹伐採を終えました。そのうち、三年がかりで植樹し、その後、年四回の下草刈りなどしているのは、護岸工事の終わっている下流約一〇〇メートルの部分で、残り一五〇メートルは、護岸工事終了のあと改めて計画しようと放置したのです。

伐採から四年経過した二〇〇七年八月、植樹した一〇〇メートルは美しい堤が維持できていますが、その向こうは、元の木阿弥、竹伐採前の昔日の姿に戻っています。

「星田山千本桜」のつぎ、「NPO交野市民創造の森」プランを準備しました。

一、会員ですが、資金支援する「支援会員」と労力提供する「ボランティア会員」を募ります。支援会員は、団体・個人とも入会金一〇万円、年会費三万円。ボランティア会員Aは、入会金、団体一万円、個人三〇〇〇円で、自分のテーマで森づくりをします。ボランティア会員Bは、入会金・年会費無料で、年四回、弁当つきで労力を提供します。

二、森づくり構想ですが、一アールから一ヘクタールの大きさで、市民が訪れて楽しく、自然保護となるアイデアを、支援会員、ボランティア会員A、市民から公募します。

三、アイデアは、「NPO交野市民創造の森」委員会が審査し、適否を決定します。

四、ボランティア会員Aは、公募に応募した自分たちのテーマが「適」と判定されれば、そのテーマで森づくりをします。小中学校、地域のまちづくり委員会、企業の労組などを想定しています。その森には、提供者の看板をとりつけます。

五、支援会員には、同委員会が、公募アイデアの中から、適切なテーマを選定してボランティア会員Bに担当させ、森づくりと管理を行います。大企業、著名人を想定していますが、やはり、提供者と協力者の看板をつけます…。

有井さんの急逝で、このプランは彼に届かずじまいとなりました。でも二〇〇七年八月現在、竹炭ボランティアによる四年の伐採は、はや頂上にまで達しています。この間、竹伐採のお陰で、ひよろひよろだったコナラやミスナラも立派な大木に成長し、地面にはそのどんぐりから幼木が伸び、当初、頭で描いた禿山のイメージはまったくありません。

「藪のなか禁煙」

竹を伐採する藪の入口に、二軒、民家が建っています。竹伐採の最初は、その大屋根を孟宗竹が覆っていました。だんだん見晴らしはよくなり竹害も消えていきました。

伐採で払った枝も、万一、悪戯放火などがあっても大丈夫なように、家から三〇メートルは離して積み上げ、その間に空間を設け、雑木などは生やしても枯草など延焼の助けになるものは置かない工夫をしています。

それでも、その一軒のご主人が、私に「藪のなかでタバコを吸う人がいる、万一、火事になったらどうしてくれる」といつて来られます。早速、「藪のなか禁煙」の紙をラミネートして入口に張り、喫煙場所も藪の外に設けて、毎回、注意を呼びかけるのですが、しばらくすると同じことをいわれます。今度は少し工夫し、そのお宅の裏庭から見える位置に、「藪のなか禁煙」の立て看板を大きく取りつけます。

このお宅には、竹伐採の初期、こんな出来事がありました。

竹伐採は、三人一組で行い、新人の場合は、怪我などのないよう指導もかね、ベテランとペアになってもらうのですが、このときは、

経験の乏しいひとばかりの組ができました。

指導が行き届かず、その組が民家近くで伐採を始め、その一本が、意図とは反対に民家に倒れ、大屋根の一部を破壊してしまいました。怒るご主人を前に、私はパナホームさんへ電話し、一刻も早く現場へ急行してほしいと業者の手配を頼みます。すぐに返事があり、一時間以内に到着することです。

業者がつくと、早速、破損状況を調べてもらい、ご主人と相談しながら、破損箇所の屋根材と雨樋の交換、そして大屋根の雨樋に詰まる竹の葉をきれいに掃除してもらいました。

しばらくしてのち、放火事件が起こります。

子供が悪戯で竹の枯枝を積んだところに火を放ったのです。消防車が来るなど大騒ぎとなって、悪戯した子供は厳しく叱られました。類焼などの被害は、もちろん、ありませんでした。藪の入口には侵入禁止の看板を立ててありますし、管理の手落ちもありません。

直後、竹伐採の日、例のご主人から何か小言があるかなと案じていましたが、顔を合わしても何もいわれません。種々の対応を通じ、信頼関係が築かれているのかもしれない。

隣のテニスクラブのオーナーのお婆さんからも、しばしば注文がきます。テニスクラブと境界を接する距離が長いものですから、敷地に被さった竹を切してほしいとか、境界を明確にする綱をしつか

り張ってほしいなどです。お呼びがかかると、私たちは最優先して要望に応え、満足してもらえようにします。交野市所有の山で伐採する以上は、役所に代わり、市民への対応に万全を期すことが大切と、たいそう気を遣います。

後継者の指名

竹炭ボランティアに明け暮れた私の支部長二期目二年は、終わるうとしていました。

日程からいいますと、二〇〇四年一月、第二回初窯式が終わり、三月、尺治川の第二回植樹セレモニーも幕を閉じ、いよいよ四月八日、第一回花見会を催すころには、私の松愛会支部長二期目がはじまることになりました。

改選を間近に控えた一月、私は、地区委員会で話しました。

「支部長二期目は、引き続きやらなければならないと思っています。ただし、条件があります。私は二期で降りたいので、つぎの支部長を、この場の皆さんが自薦か、互選で決めていただきたいのです。皆さんの中から出ないのなら、誰かを推薦いただきたい」

すると、内野さんが、同じ星田山手の渡邊省三さんをあげ、彼な

らどうかといいました。二人は同じ地区ですから、地区委員を渡邊さんに交代するという意味にもなります。

渡邊さんは、松愛会行事、とくに竹炭ボランティアの参加は熱心だし、数年前から地元盆踊りを成功させたいと頑張っていると内野さんから聞き、私が、交野支部ホームページにエールの頁を掲載したことがあります。それに、竹炭ボランティアの会長をお願いしている滝本区長が、後継者として彼をあげているとも聞いています。

私には異存ありませんし、地区委員の皆さんも、全員、賛成だといっています。

もし、彼にお願いするとしたら、一年目は地区委員として「世話女房」系の体験と勉強、二年目は副支部長として、交野支部運営全般の勉強をもらうことになります。

ただ、問題は、内野さんの任期との兼ね合いでした。彼は、あと一年を残し、任期二年の半ばにありました。予定通り、あと一年勤めますと、私の任期との関係では一年不足となって渡邊さんの勉強期間が半分になります。

私は、信頼する内野さんに笑いながらいいました。

「内野さん。申し訳ありませんが、渡邊さんを推薦した責任をとって地区委員を、任期半分で辞任してもらいましょう。いいですか」

「推薦した責任をとれといわれたら仕方ないですな。私が早く降り

て渡邊さんを確保しないと、滝本さんに先を越されたら、われわれの大損失ですしな…」

こうして私と内野さんが、渡邊さん宅を訪問して一件落着となりました。お陰で、私は、二年後、交野支部と竹炭づくりを渡邊さんに託すことが決定したので、つぎのテーマ探索に意欲を燃やすことができました。終身、竹炭ボランティア会員を勤めるのは無論です。

それにしても、内野さんは、自分の進退も心得た上で、やっぱり人集めと楽しい雰囲気づくりの名人だと、大いに感心させられたのでした。

竹炭、竹酢液の応用が広がる

ひとには、それぞれ得意領域があります。渡邊さんに竹炭ボランティアリーダーをお願いして一番変わったのが、竹炭などの応用の拡大です。

竹酢原液を三カ月から半年寝かせてとった茶色の上澄み液を、あるときまで、ほしいという方にあげていました。すべての人に効くというのではないですが、アトピーや水虫などに効いたという人がたくさん現れ、また、ほしいといってくるきます。

田端さんがリーダーのとき、そんな声に応えるには、茶色の竹酢液は印象がよくないので蒸留し、透明なものをつくらうということになりました。森賀さんに機器の選定をお願いし、田端さんが自力で技術を学んで蒸留するだけでなく、百円ショップで容器も購入して自作のラベルも貼り、結構立派な「商品」ができました。容器代など実費もいただくことにしました。

これが人気だったのですが、渡邊さんがリーダーになると、その容器の選定やラベルの制作を山野酒造さんに持ちかけました。酸に強いガラス容器の選定や清酒並みのラベルによって見事な「商品」ができました。当初のブリキ製のフタは錆びると、改良も加えられました。デパートに並べてもおかしくないほど見事で、すっかり人気になりました。

枚方の三宅さんという方が、彼は毎月熱心に竹炭ボランティアに参加しているのですが、あるとき、「こんなのどうですか」と、竹炭に花の絵を描いてもってきました。

これにいち早く反応を示したのが、渡邊さんでした。早速、百円ショップでガラス製の花瓶を買って来、その絵つきの竹炭を二、三本入れて透明な包装紙に包み、これで付加価値の高い飾りものの消費材ができたというのです。それまでも、竹炭は三〇〇グラム入り一袋三〇〇円くらいで仲間うちに頒布し、消臭材として、また、

飲料水のろ過用などとして、結構、使われていたのですが、これなら倍の価格でもおかしくないというのです。

松愛会の地区委員の仕事に、高齢や独居の方をお見舞いに訪問すると前述しましたが、渡邊さんの発案以降、この絵つき竹炭飾りをお土産に持参し、毎年、消臭材として交換してもらいます。とてもよろこんでもらえます。

ほかに、流しに竹炭を利用すれば又メリがとれるのでこの性質を活用しようと、渡邊さんは、目下、流し台の排水口の又メリとりの開発にもとりくんでいます。

渡邊さんは、こうした「商品」をストックしておいて、交野支部の総会のときなどに並べ、竹炭ボランティア活動のPRにあわせて参加者への頒布を行います。

三宅さんは、絵つき竹炭のほかにも、炭でサワガニの甲羅をつくり、足として竹の細い枝を差し込む工作も得意です。さまざまながいて、いろいろな和が広がります。

ボランティアの指導料

最近、京都のある団体が竹林整備のボランティアをはじめようと

して、竹伐採に詳しいボランティア団体に指導を乞ったところ、一日一人七〇〇〇円の指導料を請求されたと聞きました。結局、指導者二人をお願いしたとのことでした。

私は、交野で自分のボランティアを守って来ただけですから、他の事情は知らないのですが、指導にお金を請求するボランティアもあるのだと勉強になりました。

幸い私たちは、竹伐採や伐採跡の整理の仕事を交野市農とみどり課の三宅さん、竹炭の焼き方を星の里いわふねの古賀さん、竹炭や竹酢液の効能や使い方はインターネットを通じて専門家の多くのホームページなど、すべて無料で教えていただきました。

ですから、もし、われわれに指導者の派遣要請があれば、もちろん無料と考えています。交通費はどうかと聞かれれば、少し返答に困ります。国内なら、当方負担で派遣ということにし、これまでお世話になった人々への恩返しとするかもしれません。

しかし、海外の場合なら、交通費くらいはいただく必要があるだろうと考えています。海外などと突飛なことをいいますのは、実は、カンボジアから竹炭焼きの指導要請がくるかもしれないからなのです。

間接の話ですからまちがっているかもしれませんが、カンボジアへ教育支援に行っている団体から、ある団体を通じ、われわれに、

最初、竹炭を焼く技術を教えてもらえないかといってきたのです。現地の子供を学校へ行かせる資金が必要だが、資源らしいものは何もなく、竹だけがあるので、これを何とかできないか、竹炭は日本でよく売れるらしいので、これを焼いて日本へ輸出できないか、というのです。

竹炭なら、中国産など、安いものが輸入されているので輸送費だけでもコストがあわない。燃料など素材のままではむずかしいので、付加価値の高いもの、たとえば竹酢液とか、竹炭に民族的デザインの絵を描いた飾りものとか、一工夫が必要だろうと返事をしました。竹酢液を本格的にとるのなら、ドラム缶でなく本格的な窯が必要になりますから、同時に、炭焼き窯をつくる技術も現地が必要になります。その場合は、窯づくりから竹の伐採、炭焼き、竹酢液の採取、蒸留、また竹炭の絵付けなど、一人で何でもこなせる人を派遣する必要があります。そんな人は、目下、おりませんから、意識して育てねばなりません。

いずれにしても、一度、カンボジアの竹を、われわれの窯で試験的に焼き、とれる炭や竹酢液を見ないことには計画が立たないと、ただいま、現地の竹四〇〇キロの輸入を要請しています。いずれにしても、指導料は無料ではないかと思っていますが、ただ、交通費の話は、もっと先になりそうです。

あとがき

二〇〇七年八月、竹炭ボランティアが発足して約五年半、渡邊さんにバトンタッチして、一年五カ月が経過しています。

毎月一回の竹伐採と炭焼きのほか、年三回の植樹箇所の下草刈り、年二回の浄化装置の竹炭交換、一月の初窯式、四月の花見会など、二〇〇六年の参加者は延べ約一〇〇人を数え、ボランティア会員数は一三〇名、渡邊さんのリーダーシップよろしきを得て活動はすつかり定着しています。

会員一三〇名には、私流でいえば、地元を根を張った活動によって地域社会とのつながりを実感でき、多少なりとも心の満足が得られる場を提供できているのではないだろうか。

二〇〇六年一年間で窯に入れた竹の量は四・四トン、回収した竹炭は一トン、取れた竹酢液は、一リットルペットボトル二三〇本と なっています。

年四トンの竹伐採を約四年間続けた結果、四・四ヘクタールの山 地にはびこった竹は、ほぼ六、七〇パーセント伐採を終えました。 既述のように、伐採当初、竹を伐採すれば、山肌がむき出しとなっ て禿山のようになるのではないかと心配でした。なにしろ二〇メー

トルくらいに孟宗竹の茂った海に、ところどころ、やせ細った幹のコナラやミズナラが竹と競り合って梢をのぞかせる程度だったからです。

竹炭ボランティアが、交野の美しい自然を護るのに役立てば幸いですし、この活動を通じ、少しでも地域の活性化や市民の皆さんの生きがいになれば、望外の幸せです。

しかし、自然の力はすばらしく竹伐採後の空間を埋めるように、麓から順に、たちまちコナラやミズナラは、幹を太くして枝を伸ばし、巨木を生い茂らせました。山肌は、禿山どころか、太陽を受け埋もれていたそれらのドングリから幼木が伸びたり、鳥の運んだ種から木の芽が出たり、低木が地面を覆います。禿山の美観にと椈の植樹も考えましたが、自然の再生力の前にそのような余地は少しもありません。里山の自力再生後は、樹木とは成長サイクルの異なる竹の定期的伐採、太陽光を地面に届かせて森の新陳代謝促進のため、間伐と下草・低木刈りさえすればよさそうです。

活動も横に広がりました。二〇〇五年からはじまった交野市星のまち観光会議（協会の前身）の観光イベント「星のまちめぐりウォーク」「天の川七夕まつり」に店を出し、渡邊さんがラインアップした「竹炭関連商品」を頒布しています。横で、三宅さんのカニ細工に、子どもたちが黒山の人だかりです。同じく二〇〇五年から開始された交野の環境活団体など市民の手による「環境フェスタ」交野」にも参加、開催会場がちょうど「星の里いわふね」ですから、炭焼き窯を公開して炭焼きの実演も行っています。

二〇〇七年八月